
「街の灯り」 （伝奇小説「組合員の日常」 1 ）

宇曾田善武

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「街の灯り」 （伝奇小説「組合員の日常」1）

【Nコード】

N2150F

【作者名】

宇曾田善武

【あらすじ】

霊や妖怪等の怪異が出現する確率が跳ね上がった社会で、その対応に追われる便利屋『超常事象復旧組合』、略称「組合員」の日常を描く短編です。同じ背景世界、人物を使った各話完結の短編です。

右手で逆手に振り抜いた伝導トンファーは、闇の中になめらかな青い光の弧を描いて奴の霊体にめり込み、鉄骨の浮き出した壁面まで弾き飛ばした。腰の戻りにあわせて、左手で肩の呪符ダーツを引き抜きざまに投じる。チェックメイト。目標は壁に縫いつけられ、身動きできなくなった。

トンファーのグリップを分解しホルダーにしまふ。ICレコーダーを起動しながら、いつも通りの手順を事務的にこなす。

日時：6月23日、午前3時21分、場所：木澄市**町3丁目
廃ビル3f、種別：第1種、土地固着型 数1、状況：確保完了。

そこまで状況を吹き込むと、対象は目の前に迫っていた。表面に五芒星の描かれた黒手帳を見せながら声をかける。

「あゝ、『組合』のものだけど、君には浄化について幾つかの選択権がある。」

洗濯物のようにかべに吊された地縛霊は盛大に騒ぎ出した。

「おめえ、掃除屋かよ、こんなことしてただで済むと思ってねえだろうな、畜生、こんな符すぐにひっpegして、おめえなんかギタギタにしてやるんだからな、覚えてろよ」

「1、この世への末練を断ちこのまま潔く成仏する。2、独力での成仏が難しいと判断するならしかるべき高德の方に浄化を依頼する。この場合希望があるなら寺院、または教会への斡旋も行っ。」

「いいか、このビルはオレ様のものなんだ、勝手に解体してデパートを建てるなんてオレは認めねえんだ、掃除屋、おめえいくらで雇われやがった」

「3、先の手段を執らない場合、」

バブルがはじけた煽りをまともに受け破産した土地転がし成金の末路に、今の立場がわかってもらえるように、少し間をおいてゆっくりと丁寧な発音した。

「強制浄化することもできる。この場で。たった今。」

一度はホルダーにしまった伝導トンファアを慣れた手つきで再びくみ上げる。

「い、いや、ちょっと待ってくれ、話し合おうじゃないか、にいやん」

丹田を意識し、息を整え軽く気を練ると夜の廃ビルの暗がりには伝導トンファアが青白い光を放つ。ちょうど、夏のコンビニの軒先につるされる殺虫灯の様な輝きは、とても効果があった。

「待て、いや、待って。待って下さい、組合員さん、お話ししましょう。」

トンファアを持ったまま腰を開き、ゆっくりと右手を振りかぶる。肩の可動域の限界にまで到達したときに、さらに手首を返しトンファアの可動範囲を広げた。残光が緩い弧を描く。

「ごめんなさい、お願いします、待って下さい、待って下さい。」

私が悪かったです、お願いします、話を聞いて下さい。」

オレは動きを止めた。伝導トンファアに気は通したまま。

「だって、このビル、私が一生懸命がんばって建てたんですよ？中学を出て田舎から飛び出してここに来て以来、ビル掃除の仕事から始まって、私本当にがんばったんですから。毎日20時間働いてた頃もあつたんですよ！」

だいたいバブルがはじけるなんてあのときはだれも思わなかったじゃないですか。国だって、どんどんビル建てろっていうんですよ。銀行も要らないっていうのにお金を貸してくれたし。それなのに、全部私が悪いんですか？」

ビル解体を邪魔していた霊障を引き起こした地縛霊が人生を告解し始めた。まあ、誰にでも色々あるわな。

「だれも、あんたの生き方を責めちゃいない。あんたが、こうやってこのビルにしがみついていることが問題なのさ」

「だって、だって、全部持って行かれたんですよ、みんな私に頭を下げて、へらへら笑って、社長、さすがですね、なんて言ってた」

せに、いきなり手のひらを返して、会社も家も何もかも持って行っちゃったんですよ、私にはこのビルしか残ってないんだ！」

「あゝ、残念だが、社長。このビルも、もうあなたの物じゃないんだ。」

「う、嘘だ。」

「そう思いたい気持ちはわかるよ。世の中、肝心なことは嘘ばかりだからな。」

「そうか、やっぱり嘘なんだな。」

「残念だが、このビルの所有者はあんたじゃない。差し押さえていた銀行から百貨店に移った。というより、あんたがそんな姿になった時点であんたの物じゃないんだけどな。」

どうしておれはこんな会話を続けてしまうのだろう。誰のためにもならないのに。

「そんなのいやだ、おまえの話は嘘だ。そんなの嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ！！！」

このビルは私の物だ、私が建てたんだ、私の物だ私の物だ私の私の物だ！！！」

もう、十分か？このまま右手を振り下ろした方がこいつのためかもしれない。

そう思うと、トンファーを持つ手の力が増していた。その変化を敏感に察した地縛霊は再び哀れな懇願者に転じた。

「イヤだ、お願いです、消さないで、消さないで、消さないで。私は地獄行きでしょ、地獄つてずっとずっと苦しむところですよ、お願いです、お願いだからそんなところに連れて行かないで」

元社長は両手で顔を覆い泣き叫んだ。生前、こいつがどんな生き方をしていたかはある程度想像がつく。だが。

「なあ、オレは坊様じゃないから、詳しくはわからないのだが」

トンファーを下げて半歩下がりがりながら言葉を続けた。

「あんたが今苦しんでいるほど辛いつてことはないと思うぞ。」

地獄の責め苦は、更正のための仏の慈悲だ。知り合いの生臭坊主

はそう言っていたつけ。妄執にとらわれて狂っていく辛さよりは、ずっといい、とも言っていた。

「ほんとに？」

「知り合いの坊様はそう言ってたな。そいつに頼むか？」

「ほんとに？ 私みたいな奴でも楽にしてみらえるのか？」

「さあな。だが、今みたいにおかしなことはかり考えてるよりは楽になれるんじゃないか。連れてってやるよ。」

地縛霊はさすがのような目で懇願した。

「じゃあ、じゃあ、私をそいつ、その人のところに連れて行ってくれ、ください。」

それでいいのか、と念を押すと、頼む、頼みます、と答えが返ってきた。そうか、と答えて、地縛霊を移動させるために使う依り代を取り出した。

「あんたはこのビルに未練がありすぎて身動きできなくなっている。このままじゃ連れて行けないから、この紙にあんたを移す。」

「ああ、その紙にとりつけばいいんだな、ですね。……畜生、だめだ、うまくいかない、いきません。痛いんだ、痛いんですよ。うまく考えられない。あんたが、あなた様が刺したこの矢が痛いんですよ。抜いてくださいよ。」

オレはしばらく奴を見ていた。奴は盛んに痛みを訴えていた。軽くため息をついて、トンファーを左手に持ち替え、右手で呪符ダーツに手をかける。

「仕方ないな、そら、抜くぞ」

呪句をとなえると、ダーツの効力が消えた。引き抜くと、当然奴の霊体には力が戻り始める。

「ああ、ありがとう、ありがとうございます。ありがとうございます。」

奴は熱っぽく感謝の言葉を並べ立てた。

「これで、これで、」

解放された霊は両手で顔を覆い嗚咽しながら続けた。

オレは様子を見ようと一步奴に近づく。そのとき、奴が動いた。「おまえを引き裂いてやれるさ、感謝するとも思ったか！」

両手を広げ、牙をむき実体化しながら襲いかかる悪霊。避けようのない距離。

そしてきらめく青白い閃光。

「思ってないよ。」

左手で振り抜いたトンファーが奴の霊核を正確に打ち砕いていた。

驚愕した奴の存在がとたんに揺らぐ。だが、拡散しきることなく、力場が包む。

右手で空中に陣を描きながらつぶやく。

「期待はしていただけどな」

陣の完成と共に、3小節の呪句を正確に発音した。

矩形範囲指定、呪影対象固定、陽炎召還開始

魔のものの好む闇の支配する時間帯に、限定された範囲の極めて弱い火力だが闇を滅する太陽の炎が呼び出された。オレに扱える程度の魔術なのだから、さして高位の術ではないが、霊核を打ち砕かれた亡霊ごときを滅するにはあまりある。

一件落着。あとは朝になって除霊の完了を依頼主に報告するだけだ。ああ、事件ファイルの整理も必要だけれど、

日時：6月23日、午前3時28分、場所：木澄市**町3丁目
廃ビル3f、種別：第1種、土地固着型 数1、対応：強制浄化。
以上。

60年前の事件を機に生まれたオカルト事件専門の便利屋、超常事象復旧協同組合。その日々の活動は、だいたいこんなものだ。依頼の4割をしめる、1種処理、つまり除霊はこんな風に力任せに解決することしかできない。掃除屋などと呼ばれるのも当然かもしれない。

ない。

それでも。それでも、この世の中、後始末が必要なほど散らかっているよりは、片づいている方がいい。そうだろうか？

明日から取り壊し作業が再開するであろうビルを後にする。闇を、まばらな街灯がすかに照らしている。全てを照らす太陽が姿を現せば、街灯のわずかな明かりはかすんで消えるとしても、いまは、そのわずかな明かりに価値がある。つまりは、オレの仕事もそういうことなんじゃないだろうか。そう思いながら帰路についた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2150f/>

「街の灯り」（伝奇小説「組合員の日常」1）

2010年10月8日15時16分発行